

25の講義内容 解読資料の整理記述

― パワーポイントによるプレゼンテーション ―

萩原 義雄

隗よりはじめよ

ご自身がまとめてみようとすると資料、例えば「卒業論文」に取り扱った論題内容をシート十枚程度に仕立てて、これを用いながら簡潔図式化し発表型に整理してみよう。そこでまず実際の「プレゼンテーション」資料を観賞しておこう。

- 1 「国」の文字 「萩原公開」
- 2 松嶋瑞巖寺蔵『天台記』の文字 「萩原公開」
- 3 『平家物語絵巻』その1 「瓶子」〔学生公開〕
- 4 『平家物語絵巻』その2 「しはがれ聲」〔学生公開〕
- 5 『平家物語絵巻』その3 「物の怪」〔学生公開〕
- 6 『平家物語絵巻』その4 「富士川合戦」〔学生公開〕
- 7 『搥囊鈔』の「虹」について 「学生公開」
- 8 和歌の解釈と鑑賞 「一般公開」
- 9 俳句の特色と鑑賞 「一般公開」

この1から9の内容を参考にして、ご自身の考察する実際資料を作成することを最後に執り行うことにする。

はじめて気づくこと

資料作成に於ける留意点

A 題材・題意を決める

- ① 日本語文化に関わる資料として、第三者にアピールしたい素材を選択する。
- ② 素材は新発見にはじまり、ふだんよく知っていることからまで幅広く捉えることが必要である。
- ③ 旧知のことでもよく見ると、こうも異なることが見えてきたという類は妙味のある世界かも知れない。たとえば、中国文献資料の胡三省『音注資治通鑑』は、歴代史書注釈のなかで資料価値の高いという定説とされてきた資料であった。この資料が司馬光の本文を凌ぐとまで言われてきた。実際に『四庫提要』の「光門人劉安世嘗撰音義十卷、世已無傳。南渡後、註者紛紛、而加井乖謬彌甚。至三省乃匯合羣書、訂訛補漏、以成此書」と評しているのである。この胡三省という人物を陳垣『通鑑胡注表微』で愛国史家と評価した。だが、それ以前の注釈書である史昭『通鑑釋文』を以て丹念比較検討していくことで、「手柄を独り占めにし、自己の名聲にこだわる小狡い学者」という別な人物像が浮かび上がってきたという。こんなことあるの？ という観点が見逃せない着想となろう。後はこれをどう調理するかである。

B はじめて作品を見た人がその内容をしっかりと把握できる工夫

- ① 文字と図絵の組み合わせ
- ② 画面上の構成と色合い
- ③ 説明と内容文との整合性

④ 結論とすることがらを明らかにする

死馬の骨を買う

「名馬」を我がものにする王様は、賢臣の言動に耳を傾ける余裕のある人でなければ適うまい。「名馬」は一日にて成らず、だが智恵のある家臣は我が身の智恵を以て王の敵命を実行し、王の怒りを買うような死んだ名馬を五百金という大枚を費やして買ってきた。この事実をどう受け止めるかの裁量が王と臣、相互の極めつけなはたらきかけとなる。実際、この故事では、王に「王様、死んだ馬でさえ、五百金で買ったとなれば、生きた馬はいかほどの高い金子をもつて買ってもらえるのだろうか」と世の人々は思うでしょう。この名馬を探しているという噂が市中隈無く知れ渡り、黙っていても名馬が向こうからやって参ります」と弁明する時を得られたので当に「起死回生」なる顛末を迎えることになるのである……。そして、一年のうちに三人もの人が一日千里を走る名馬を携えて王の前に参上したというのである。此の求めて止まぬ王たるや、この名馬を買うだけの財政を常に維持することは容易でないことも然りである。

※参考『戦国策』：燕策上・昭王　すぐれたものを手に入れるには、金を惜しまないことである。そして、すぐれたものを求めていることを世間にアピールすることである。このことわざは、しきりに有能な人材を求める、そのためにさほど価値のない者を厚遇する意味に使われる。

中国の戦国時代、燕（えん）の郭隗（かくかい）が、賢者を得るための方法を尋ねられて答えた時のたとえ話。千里を走る名馬を千金で買ってくるよう指示された者が、死んだ名馬の骨を五百金で買って帰ってきた。叱責に対して彼は、死馬の骨に大金が投じられたと噂が広がれば、探し求めなくとも向こうから、生きた名馬を連れてくる

者がいるはずだと答える。はたして、一年も経たないうちに三頭の名馬が集まったという。

隗はこのあとに続けて「隗より始めよ」と、賢者ではない私を厚遇すれば賢者が得られます、と言っている。さしずめ隗は死馬の骨だということになる。

ギリシヤ神話の「タンタロス」は、父の大神「ゼウス」の怒りに触れ、地獄に追放される。此の地獄で彼が食べたい飲みたいと思うすべてが目前で消滅してしまうのだ。「目の前に見えていながら、これを手にすることが赦されたい」刑罰を受けたのだ。なまじ欲しいものが眼前にちらちらしている、これを求めずじっと堪えている姿勢は、人であればひどく苦しいことであろう。現代の消費と情報の世界では、あれも欲しいこれも欲しいと人の欲望を掻き立てる情報が星空の流星群のようにあつと顕れたと思いきやぱあつと消えていく、古の「タンタロス」に匹敵する。英語で「tantalyze」と表記する。意味は「じらす」である。

※ tantalyze [Look up tantalyze at Dictionary.com]

1597, from L. Tantalus, from Gk. Tantalos, king of Phrygia, son of Zeus, punished in the afterlife (for an offense variously given) by being made to stand in a river up to his chin, under branches laden with fruit, all of which withdrew from his reach whenever he tried to eat or drink. His name perhaps means lit. "the Bearer" or "the Sufferer," by dissimilation from *tal-talos, a reduplication of PIE base *tel-, *tol- "to bear, carry, support" (see extol). His story was known to Chaucer (c.1369).